

魯迅『狂人日記』における「批孔」と「食人」の内在的關係

The Immanent Relationship between “Anti-Confucianism” and “Cannibalism” in “Kuang-ren Riji” by Lu Xun.-

嶋田 聡*

Satoshi SHIMADA

1. はじめに

中国で最初に書かれた口語体の近代小説である魯迅(1881-1936)の『狂人日記』は、ある意味難解な小説であるといえる。その難解さはひとえに、中国における旧道徳・旧思想を体現する儒教(礼教)に対する批判と、中国で昔から行われていたという「食人」(人肉食、Cannibalism、中国語:「喫人」)の問題が、作中世界において「礼教食人」としてあたかも一つのものであるかのように語られているところからくるものだと思う。つまり、本来は結びつかないはずのものが作中世界においてぴったりと結びついているように「見える」ところが、おそらく多くの読者に戸惑いを与えるのである。

本論は、まずはこの『狂人日記』の作品テキストを精読し、作品内における「礼教批判」と「食人」の関係を考察することにより、その「難解さ」のありかを見つけ出す。そして、本作品が成立するに至った外的要因とも関連づけながらそれらを解きほぐし、同時に本作品を執筆した作者のモチーフにも迫っていかうとするものである。

2. 『狂人日記』と「礼教食人」

2. 1 「礼教」および「批孔」について

作品の精読に入る前に、本論のキーワードにもなっている「礼教」と「批孔」について、その意味するところを述べておきたい。

まず、「礼教」というのは封建制下の中国における階級制度や家父長制度を支えてきた礼法と道徳のことを指す。ただ、魯迅が『狂人日記』を発表した当時の中

国、特に知識人たちが文学革命に際して旧道徳を批判する文脈の中では、「礼教」は「儒教」(もしくは「孔子教」、「孔教」とほぼ同義のものとしていた)のである。したがって、当時の彼らが行った「儒教批判」というのは、実際のところは「礼教批判」だったのであり、本論においてもそのことを踏まえた上で「儒教」と「礼教」との間には特に意味上の差異を設けていない。

このことに関連して、当時の中国における儒教批判の是非については、中国哲学者の加地伸行が次のような見解を述べている。

辛亥革命により、二千年以上続いた皇帝制を倒して作った共和制国家、中華民国の成立(一九一二年)の前後、彼らは儒教を徹底攻撃した。人が「人を食う」家族制度を支える理論としての儒教、皇帝制時代の理論としての儒教を中国の近代化を妨害するものとして否定したのである。

しかし、魯迅らのそうした極端な批判を読むにつけ、私は彼らの儒教批判が一面的であると思わざるをえない。と言うのは、中国の前三世紀の漢王朝以来、二千年以上にわたる長い歴史において、なぜ儒教が中国において最高指導原理として継続し得てきたのかということに対する分析が十分でないからである。

魯迅ら近代派知識人が攻撃しているのは、実は儒教の礼教性(社会規範、延いては倫理道徳)の面である。しかし、果たしてこうした礼教性だけで二千年以上も儒教が中国史上に君臨することができたのであろうか。

礼教性は、結局は、制度化された、上から与えられたものである。そういう押しつけだけで人々が儒教を二千年以上も支持し続けてきたのであろうか。上からだけではなくて、実は下からの大衆の支持があったがゆえに、儒教が長く最高指導原理となり得たと考えるほうが自然である。

(中略)にもかかわらず、魯迅を始め中国近代の知識人は、まさに儒教における礼教性のみを見て、それを攻撃している。しかし、もう一方の宗教性をほとんどまったく見ていないのである。いや、分っていないから見えていないのである。これでは、いくら礼教性を攻撃しても、儒教はびくともしない。¹⁾

少々引用が長くなってしまったが、中略の部分も補足しながら要点をまとめると、儒教には「上から」と与えられた「礼教性」と「下から」の大衆の支持としての「宗教性」という両側面があり、その両者があればこそ儒教は中国で二千年以上も最高指導原理たり得たのであって、「魯迅ら近代派知識人」たちはそのことが「分っていないから見えていな」かったということである。さらに、加地は宗教を「死ならびに死後の説明者」と定義した上で、「儒教の宗教性とは、現世を快樂とする東北アジア人の現実感覚にふさわしい死ならびに死後の説明理論である。そしてそれは、具体的には祖先祭祀として存在する」と述べ²⁾、その祖先祭祀は「孝」の一つの表現であるとして次のように説明する。

これを肉親の関係で言えば、

祖先……祖父母——父母——自己——子——孫……(一族)

ということになる。整理すると、(一)祖先との関係(過去)、(二)父母との関係(現在)、(三)子孫・一族との関係(未来)、を表している。そこで、儒は、この関係をばらばらのものとしないうで、一つのものとして統合する。すなわち、(一)祖先の祭祀(招魂儀礼)、(二)父母への敬愛、(三)子孫を生むこと、それら三行為をひっくるめて「孝」としたのである。³⁾

確かに、儒教の本質をその宗教性に見るならば、加地のこうした批判はきわめてまっとうなものといわざるを得ない。当時の中国知識人たちが民衆の中で孤立してしまっているように感じるのも結局はそこ、つまりは民衆の「下から」の支持としての儒教の「宗教性」が見えていない点に起因するものだと思われるからである。

ただ、別のところで加地自身も認めている⁴⁾ように、中国では社会構造の変化にともない現在では儒教の礼教性は完全に衰退してしまっている。そういう意味ではやはり王朝時代の「礼」はもともと現代社会にはそぐわないのであって、民国初期の頃に「魯迅ら近代派知識人」らによって行われた「礼教批判」としての儒教批判も一応意味があるものだったのではないだろうか。たとえばそれによって儒教の「宗教」性に何らのダメージをも与えることがなかったにせよ、王朝による専制支配が終わり、共和制の近代国家を建設していこうとしていた当時の中国においては、それまでの政治的・最高指導原理であった「礼教」としての儒教に対する知識人の側からの批判や反発は、歴史的に見て必然だったと考えられるからである。

では、ここから当時の儒教批判の内容をざっと見ていくが、その一番の要は中国の過去と現在の支配者たちが儒教を人民に対する支配の道具にしてきたという認識の共有と、「革命」によってその悪しき歴史そのものを断ち切り、共和制の近代国家建設に向かうべきという主張にあったといえる。たとえば、当時の儒教批判の主戦場だった雑誌『新青年』の創始者かつ主編の陳独秀(1879-1942)⁵⁾は、孫文から中華民国臨時大統領の座を奪い取った袁世凱(1859-1916)が尊孔運動とともに帝制運動を発動し、その後、思想家の康有為(1857-1927)が儒教の国教化を憲法に盛り込むことを黎元洪大統領と段祺瑞國務総理に進言すると、すぐさま「憲法と孔教」⁶⁾、「孔子の道と現代生活」⁷⁾などを相次いで発表し、「尊卑を別ち貴賤を明らかにする孔教」は平等・人権を基礎とする共和制の理念とは相反するものであるとして、一連の動きに対して強く反発した。

また、当時の代表的な「反儒」論者として知られる呉虞(1872-1949)も、「家族制度が専制主義の根源であるの論」⁸⁾の中で『論語』「学而 第一」の「有子曰、其為人也孝弟、而好犯上者鮮矣。不好犯上、而好作亂者、未之有也」(「有子曰く、其の人と為りや孝弟にして、上を犯すを好む者は鮮なし。上を犯すを好まずして、乱を為すを好む者は、未だ之れ有らざるなり」)⁹⁾という部分を引用してそれを「君主専制が家族制度を利用する理由」であると指摘し、「上を犯し乱をなすことを防ぐ方法としては、ただ孝弟によってのみその成功を収めることができるのである」¹⁰⁾と述べている。つまり、まず個を抑圧する道徳規範としての「孝」による家族制度があり、その上に「忠」としての専制主義が君臨

しているのであって、両者はがっちりと手を結んで人民を支配しているのだという指摘であり、さらに呉は「その害毒はまことに洪水や猛獣にも劣るものではない」¹¹⁾とまで言い放っている。

この他にも、初期中国共産党の指導者で北京大学教授の李大釗(1889-1927)や、陳独秀と親交のあった教育者の易白沙(1886-1921)などの論客が次々と自論を展開し、儒教批判はひとかどの盛り上がりを見せていた¹²⁾。そして、そんな中『新青年』誌上には胡適(1891-1962)の「文学改良芻議」¹³⁾、陳独秀の「文学革命論」¹⁴⁾が相次いで掲載されて文学革命の時代を迎え、翌年の魯迅『狂人日記』の掲載へとつながっていくのである。ここではひとまず、儒教批判と文学革命がほとんど同じ時期に起こっているということ、さらには魯迅の『狂人日記』はその動きに応じるかたちで書かれ、発表されたものだとを確認しておく。

次に、本論のもう一つのキーワードである「批孔」について説明する。これは読んで字のごとく、「孔子を批判する」という意味であり、文化大革命末期の1973～74年に行われた「批林批孔運動」(林彪¹⁵⁾を批判し孔子を批判する政治運動)の「批孔」からとったものである。そしてちょうどこの頃、人民文学出版社から『魯迅批孔反儒文輯』(以降は『文輯』と略記)という本が出版され、魯迅が反儒的知識人の模範のようにして祭り上げられていたことを知り、本論の内容とも関係があるとの判断からサブタイトルにこの「批孔」という表現を用いた次第である¹⁶⁾。

この『文輯』の前書きに当たる「出版説明」には次のように書かれている。

偉大なる共産主義者魯迅はその戦闘の生涯の中で、孔子を代表とする儒家思想に対して決然たる妥協のない闘争を行った。彼の多くの文章は、孔子学説の反動性と虚偽性を深く解剖分析し、袁世凱から蒋介石等に至る反動派と帝国主義者の尊孔読経の反動の実質を暴き出し、政治的、思想的、理論的な面から有力な批判と打撃を与えた。¹⁷⁾

袁世凱の尊孔運動については先に述べたが、1930年代に入ると当時の中国で独裁者としての地位を築きつつあった国民党の蒋介石(1887-1975)¹⁸⁾も、1934年2月に「新生活運動」と称して中国人としての「礼儀」や「廉恥」の復興などを提唱し、儒教的理念に基づく国家総動員体制を目指すファシズム運動を起こしてい

る。また、翌年日本でもその動きに合わせるかのように東京の湯島聖堂に聖廟を再建して中国から孔子の肖像画を寄贈されたという話があり、上記の文中でもそれについて触れている。そして、ちょうどその頃に書かれたのが、この『文輯』にもその中国語訳版が収録されている魯迅の日本語によるエッセイ¹⁹⁾「現代支那に於ける孔子様」(1935年)なのである。

その内容の骨子を抜き書きしてみると次のようになる。最初に説明しておくが、下記の文中に出てくる日本でのエピソードは、魯迅が日本に留学していた頃²⁰⁾の話である。

近頃の上海の新聞は日本の湯島に孔子の聖廟が落成されたから湖南省主席何鍵將軍から一向秘蔵して居た孔子様の画像を寄附したと報道して居る。実を言へば支那に於ける一般の人民は孔子様がどんな顔をして居たかと云ふ事については殆んど無知である。昔から一県毎に屹度聖廟、即ち文廟なるものはあつたけれども其の中には大抵聖像がない。凡そ尊敬すべきものを絵き或は彫塑するには一般に普通なものよりも大きくする事を原則として居たが最も尊敬すべきもの、例へば孔子様の様な御方になると像も冒瀆となり寧ろ何も無い方がましだと考へたらしい。

自分の生れた時は清朝の末で孔子様はもう『大成至聖先師文宣王』と云ふおそろしい程えらい肩書きを持つて言ふまでもなく聖道はとくに全国を支配した時代であつた。読書子に対しては政府から一定の本、即ち四書や五経を読ませ一定の註釈に従はせ一定の文章、即ち所謂『八股文』を書かせ又一定の議論を言はした。併し此等千篇一律な儒者達は四角な地面ならよく知つて居たが丸い地球になると何も知らない、ここに於いて四書などに書いて居なかつた仏蘭西や英吉利と戦つて失敗してしまつた。孔子様を拝みながら死ぬよりは寧ろ自分達を保存した方がましだと思つた為かどうかは知らないが兎角今度は一生懸命に孔子様を尊敬した政府や役人から先づ動揺し出して公費で毛唐の本を盛んに翻訳し始めた。

或日の事である。学監大久保先生が皆を集めて言ふには君達は皆な孔子の徒だから今日は御茶の水の孔子廟へ敬礼しに行かうと。自分は大に驚い

た。孔子様と其の徒に愛想尽かしてしまつたから日本へ来たのに又おがむ事かと思つて暫く変な気持ちになつた事を記憶して居る。さうして斯様な感じをしたものは決して自分一人でなかつたと思ふ。

孔子様が『モーダン聖人』になりきつたのは死んでからの事で生存中には矢張り頗る苦んだのである。彼処此処駆廻つて一度は魯国の警視総監までになりあがつたけれども直ちに下野して無業となり又権臣に軽蔑され百姓にからかはれ其上暴民に包圍されて腹がひどく減つてしまつた事もあつた。

孔子様が死んだ後には運は割合によくなつたと云つてもよいと思ふ。もう八釜しく言はないから色々な権力者に色々な白粉で化粧され段々いやになる程の高さまで祭り上げられた。併し後で舶来した釈迦様と比較すれば実にみじめなものである。成程一県毎に聖廟即ち文廟なるものある事はあるがそれは実に寂寞な冷落な有様で一般の庶民は決して敬礼には行かない、行くなら仏寺か神廟である。若し百姓などに孔子様はどんな人かと問へば彼等は無論聖人だと答へるが併しそれは権力者の蓄音機にすぎない。

最近の例を見ればもう一層はつきりとわかる。孔子様は二十世紀の始めからひどく不運であつたが袁世凱時代になつたら又憶出されて祭る典礼を恢復したばかりでなく変挺な着物まで新調して祭るものに着せた。これに続いて来るものは帝制であつた。

坊主を憎むから袈裟まで憎む上に孔子様は或る目的の道具に使はれる事もこれであらかじめはつきりと感付いて彼を引倒さう欲望も益々盛んになる。だから孔子様を完全にいかめしく装飾し出す時には屹度そのあらを探す論文や作品も現はれてくる。

支那に於ける一般の民衆、殊に所謂の愚民なるものは孔子様を聖人だと云ふが聖人と感じない、彼に対してはつゝしむが親しまない。併し自分はどうも支那の愚民ほど孔子様を了解するものは世の中にあるまいと思ふ。成程孔子様は大変な国を治める方法を考案した、併しそれは皆な民衆を治めるもの、即ち権力者達の為めの考案で民衆其者の為めに工夫した事が一向ない、『礼庶人に下らず』である。

権力者達丈の聖人になり遂に『敲門磚』(権力の門をたたく時にだけ必要とされる煉瓦のこと:引用者)になつても仕方ない。²¹⁾(下線引用者)

まず、下線部を見ると、このエッセイでは主に二つのことがらが述べられているのが分かる。一つ目は孔子(や彼の学説)が「権力者」(やそうなりたい人間)たちによっていつも利用されてきたことであり、もう一つは「民衆」(とくに「愚民」と呼ばれる下層民衆)は孔子に対して「つゝしむ」ことはあつても絶対に「親しまない」ということである。ちなみにこの「権力者」を「圧迫者」、「愚民」を「被圧迫者」と置き換えてみると、その関係性は魯迅が生涯にわたって考え続けてきた「革命」思想²²⁾におけるそれにぴったりと一致する。

また、下線部のない二つの引用段落には孔子に対する批判というよりはむしろ同情が示されているのも興味深い。要するに、「権力者」には「敲門磚」として利用されるだけであり、「民衆」からは親しまれず、さらには「坊主を憎むから袈裟まで憎む」(坊主憎けりや袈裟まで憎い)ということ自分たち「近代派知識人」によって盛んに攻撃されてきた孔子に対して、この時の魯迅は一人の人間としてその孤独さに同情しているのである。このエッセイを書いた当時の魯迅は、周囲には論敵だらけで国民党政府からも命を狙われているような状況の下、上海の共同租界で書店を経営していた日本人の内山完造(1885-1959)にかくまわれるかたちでひっそりと身を隠すようにして生活していたのであり、ここではそういった自身の状況と生前の孔子のそれとを重ね合わせて述べているようにも見受けられるのである。

孔子と魯迅の社会的立場における共通性については、魯迅研究者の片山智行が次のように述べている。

孔子は二千五百年も前に、人間としての「いい加減」さの対極にある仁の大切さを説いていた。孔子の説く仁は、誠実と思いやりの精神を基礎としている。したがって、仁は、ごまかしをしたり、他人の悲劇を冷淡に見物する、人間としての「いい加減」さと、真正面から対立する。古代中国において孔子が説いた仁の教えは、人間としての「いい加減」さの克服をめざす点においては、魯迅の主張と異なるところはない。

(中略)自分たちの生活を破壊する圧政者と戦って打ち勝つためには、どうしても中国人の国民性とも

言うべき、人間としての「いい加減」さを克服しなければならぬ。そのためにこそ、魯迅は、「いい加減」に生きる民衆に対して、ときには諧謔や皮肉を交えながらも、痛烈な批判を加え続けたのである。

(中略)孔子も、魯迅も、生まれた時代こそ異なるが、彼らはともに、人々が人間らしく生きることのできる社会をめざして、それぞれの現実の只中でひたすら努力した。

人間性に満ちた社会を実現するためには、人間〔中国人〕が、それぞれの現実の中で、人間としての「いい加減」さを克服して、真っ当な人間にならなければならない。孔子と魯迅が一途に訴えているのは、まさにそのことなのである。²³⁾

以上のことを考慮し、本論における「批孔」の意味するところは孔子に対する個人的な批判や攻撃ではなく、あくまで『狂人日記』執筆当時の知識界に吹き荒れていた、反帝制運動から文学革命へという流れの中にある「礼教批判」のことを指すものとする。先にも述べたが、魯迅はその声に呼応するようにして『狂人日記』を執筆したのであり、本論においてもまずそこを作品分析の出発点にしようと考えているのである。

では、次節から実際に作品を読んでいく。

2. 2 『狂人日記』における争点

本作品『狂人日記』は、ある男が精神の「迫害狂」を患っていた時に書いた日記という体裁をとる一人称独白体の小説である。この男は作品冒頭の前書きのみに登場している「余」(私)の「中学時代の良友」の弟であり、現在ではすでに病状が回復して別の土地に「任官待ち」として赴任しているということである。

その第一章は次のように始まっている。

今日の夜は、素敵な月明かり。

僕がこれを見なくなって、もう三十余年になるが、今日を見たので、気分はこのほか爽快だ。これまで三十余年、ずっとぼんやりしていたんだ、とようやくわかったが、やはりしっかり用心しなくては。さもないと、あの趙家の犬が、どうして僕をジロジロ見るのだ。

僕が心配するのかわけありなのだ。²⁴⁾

ここではまず、主人公の男が月を見たことにより気分が爽快になり、それと同時に被害妄想の具体的な症

状が出始めた様子が語られている。つまり、月光によって覚醒したことにより、男は現実を超越した「狂人」の世界に一步足を踏み入れたということである。

そして、第二章では警戒すべき対象が、先の「犬」から周囲の「人間」へとステップアップしている。

朝、用心して外出すると、趙尊老の目つきがおかしく、僕を恐れているような、狙っているような感じなのだ。ほかにも七、八人が耳打ちしながら僕の噂をしており、僕の視線に気づくと怖がるのだ。通りの連中はみなこんな具合だ。中でも一番凶悪そうな奴が、大口を開けて、僕に向かい笑ったので、奴らはすでに、段取りをつけたんだと思い、僕は全身に寒気を覚えた。²⁵⁾ (下線引用者)

また、下線部にあるように、彼らはすでに何らかの「段取り」をつけていると感じるのであるが、それが何のための段取りであるのかはここでは明かされない。それがはっきりするのが、次の第三章である。

その「段取り」とはつまり、「食人」のための段取りだったのである。

なんと言っても変なのは昨日通りで見かけた女で、息子を殴りながら「こん畜生め!!おまえに噛みつきたいぐらいだよ!」と言いつつ、僕の方を見ているのだ。僕が驚きのあまり、慌てたようすを見せたので、あの不気味で凶悪な顔をした連中が、どっと笑い出した。²⁶⁾

数日前、狼子村の小作人が不作を訴えてきて、僕の犬兄さんに向かって言うには、村にとんでもない悪人がいて、みんなで殴り殺したところ、数人の者がその男の心臓と肝臓をえぐり出し、油で炒めて食べたという——肝っ玉が太くなるからだ。僕が口を挟むと、小作人も犬兄さんもジロジロと僕を見ていた。今日になって二人が、外の連中とまったく同じ目つきをしていたことに気がついた。

思い出すと、全身に寒気を覚える。

奴らは人食いをするのだから、僕のことも食べてしまうかもしれない。²⁷⁾ (下線引用者)

こうして作品冒頭から徐々に膨らんできた主人公のぼんやりした不安や警戒感が、突如「食人」という具体像を身にまとって作中世界に現れたのであり、それが

主人公をさらなる恐怖に陥れるのである。そして、本作品の最大の争点である「礼教」と「食人」との結びつきが次のように語られることになる。

何事もやはり研究してこそ、はじめてわかるのだ。人が昔からしばしば人食いしてきたことは、僕も覚えてはいるものの、ちょっとあいまいだ。歴史を繙いて調べてみると、この歴史には年代はなく、どのページにもグニャグニャと「仁義道德」などと書いてある。どうせ眠れないのだから、夜中まで細かく読んでいると、字の間から見えてきた字とは、本の端から端まで書かれている「食人」の二文字だった!

本にはこの字がたくさん書かれており、小作人もこの言葉をたくさん口にするというのに、みなニヤニヤ笑いながら怪しい目つきで僕を見ている。

僕も人間なので、奴らは僕を食べたくなったんだ!²⁸⁾(下線引用者)

まず、「この歴史に年代はなく」という表現に、この主人公の「狂人」としての超越的な視点が見てとれる。つまり、主人公が目にした「年代のない歴史」とは、新島惇良の言葉を借りていえば「時間という「正常人」の存在様式では見ることのできぬもの、四千年の時間が無意味になり別の意味になる世界」²⁹⁾なのであり、それはこの「日記」の世界そのものであるともいえる。また、それはある意味「普遍的な歴史」ということでもあり、作者は「狂人」である主人公にそれを見透かす能力を与えているのである。そして、その「普遍的な歴史」として主人公が目にしたのが「仁義道德」と「食人」だったということである。

さらには、この「仁義道德」と「食人」とがちょうどコインの表と裏のような関係になっていることにも注意が必要である。すなわち、中国の「歴史」の表向きの顔は「仁義道德」(礼教)であるが、その裏の顔として「食人」が存在するということになる。しかも、主人公が目にしたこの「食人」という文字は「本の端から端まで書かれている」とあることから、その存在感は「礼教」を圧倒しているのであり、むしろ「食人」の悠久の歴史の中に「礼教」がぼつんと置かれているかのような印象である。

したがって、この「礼教」と「食人」は中国の「歴史」における「表の顔」と「裏の顔」ではあっても、その歴史的比重は「礼教」=「食人」などと等号で結ばれるようなものではない。一つ前の引用文中に、殺した「悪人」の心

臓と肝臓を油で炒めて食べたという話が出てきたが、その理由が「肝っ玉が太くなるから」というのを見てそれは明らかである。「肝っ玉が太くなる」というのはおそらく道教などの不老長生を目的とする民間信仰にもとづく考え方であり、「礼教」(儒教)とは何の関係もないのである。

それは次の第四章の冒頭の場面でも同じである。

朝、僕はしばらく静かに座っていた。^{チェンラオウ}陳老五が食事を届けてきた、野菜ひと碗と蒸し魚ひと碗。この魚の目は白く硬く、口を開けており、あの人食いたがる連中ぞっくりだ。少し箸をつけたものの、ヌルヌルとしていて魚か人かもわからず、ゲーゲー吐き出してしまった。³⁰⁾(下線引用者)

つまり、下線部の「あの人食いたがる連中」というのは先に見た通り、何らかの民間信仰によってそうしたがるのであり、やはりここでも「礼教」とは何ら関係がない。ただ、続いて主人公の「大兄さん」(大哥)が「人食いたがる連中」の列に加えられるあたりから、「礼教」(「孝悌」と「食人」とが間接的にではあるが関係をもち始めるのである。

まず、「大兄さん」は作中では次のように主人公によって「連中」の仲間に取り入れられている。

あれこれ悩まず、静かに養生しろだって! 養生して肥れば、奴らも当然食い分が多くなるだろうが、僕にはなんのいいこともなく、何が「良くなりますよ」だ? 此奴らが、人は食べたいが、こそこそなんとか隠そうとして、一気に手を下せないとは、実にお笑い草だ。僕は我慢しきれず、声を上げて大笑いしたので、たいそう爽快だった。笑い声に正義と勇気が溢れていることは自覚していた。爺さんと大兄さんの顔色が一変したのは、僕の勇気と正義感に圧倒されたからだ。

しかし僕に勇気があればこそ、奴らはこの勇気にあやかりたく、いよいよ僕を食べたくなるのだ。爺さんは戸口を出るとまもなく、小声で大兄さんに言った。「早めに召し上がるように!」大兄さんもうなずいていた。大兄さん、あんたもか! これは意外な大発見だが、実は意外でもなく、仲間同士で僕を食べる人、それが兄さんなんだ!

人食いが僕の兄さんだ!

僕は人を食う人の兄弟なのだ!

僕自身は人に食われても、それでもやはり人を食う人の兄弟なのだ!³¹⁾ (下線引用者)

これを見ると、まず最初と二番目の下線部には、「奴ら」が「僕を食べたくなる」理由が述べられている。ここに登場している「爺さん」は「大兄さん」がつれてきた医者であり、主人公には「奴ら」の一味として認識されている。そして、「僕を食べたくなる」理由とは「この勇氣にあやかりた」いから、すなわち勇者の肉を食べて「肝っ玉が太くなる」などの何らかの効能を期待しているからなのであり、やはりここでもその理由は「礼教」とは直接的に関係がない。

ただ、その後の場面でちょっとした勘違い³²⁾から、普段から主人公が「礼教」の「孝悌」の情によって慕っている「大兄さん」までもが「食人」の列に加わっていると認識されてしまうと、話が急にややこしくなってくる。なぜなら、「礼教」における「孝悌」というのは父母に孝行して兄にしたがうことであり、そんな尊敬すべき「大兄さん」が「人食い」をしているとなれば、主人公自身も到底無関係ではいられなくなるからである。それゆえ、上記引用文中の最後の場面において、主人公はひどく取り乱した様子を見せているのだといえる。

こうして「礼教」と「食人」とがようやく接点をもち始めたかに見えたのだが、続く第五章の冒頭では次のように再び民間習俗による「食人」の話がもち出されている。

この数日は一歩退いて考えてみた。もしあの爺さんが首切り人の変装ではなく、本当に医者だとしても、やはり人を食う人である。奴らの祖師の李時珍が書いた『本草ナントカ』に、人肉は煎じて食すとはっきり書いてある。奴はそれでも自分は人は食わないと言えるのか?³³⁾ (下線引用者)

この日本語本文の藤井省三の訳注によると、下線部にある李時珍(1518-93)は薬物学の著書『本草綱目』の著者として知られる人物である³⁴⁾。また、人民文学出版社版『魯迅全集 第一巻』(2005)の注によると、この本では唐代の陳藏器『本草拾遺』中の「人肉は結核を治す」という記述がとり上げられ、それに対して著者の李時珍は異議を唱えているのであって、『狂人日記』上記引用文中の「人肉は煎じて食す」というのは「狂人」による「記述中の誤記」(記中語誤)であるとされている³⁵⁾。

いずれにしろ、ここまでは民間習俗としての「食人」が語られているのであり、この直後の場面からようやく「礼教」の名において行われる「食人」の話が出てくるのである。

わが家の大兄さんに対しても、無実の罪を着せているわけではない。僕に古典を教えてくれたときに、その口で「子を易えて食す」こともあると言ったのだ。またあるときに悪人について議論した際、殺すだけでは済まない、「肉を食らい皮に寝ぬべし」とも言っていた。僕は当時はまだ幼く、なかなか心臓が鳴りやまなかった。先日狼子村の小作人が来て心臓や肝臓を食べたことを話したが、大兄さんはまったく驚きもせず、相づちを打ち続けていた。考え方は昔と同様、残酷なのだ。「子を易えて食す」こともあるのなら、何でも替えられ、誰でも食べられる。僕は昔はそんなお説教をもっぱら聞くだけで、いい加減に聞き流していたが、今こそわかったことは説教の最中も、大兄さんの口のまわりは人肉の脂で塗られていたばかりか、胸の内も人を食べたいという思いでいっぱいだったのだ。³⁶⁾ (下線引用者)

文中の下線部、「子を易えて食す」と「肉を食らい皮に寝ぬべし」は、どちらも孔子が編纂したと伝えられる歴史書『春秋』の有力な注釈書である『春秋左氏伝』からの引用であり、前者は天災や戦争などの非常時に子供を取り替えて食べたという話であり、後者は獣のような敵に対しその肉を食べ皮をはいで動物にしたいほどの強い憎しみをもつという意味である³⁷⁾。これを見ると、まず「子を易えて食す」というのは親が「礼教」の「孝」を逆手にとって自らの子を犠牲にする行為であると解釈できるし、「肉を食らい皮に寝ぬべし」についても自らの主君に対する「忠」を極端な表現を用いて表したものと読める。つまり、どちらも「礼教」の名の下で行われた「食人」ということができるのである。とくに前者については家族内での話であり、「孝悌の序」における下位者が上位者の犠牲になるということなので、主人公はいつか自分も「大兄さん」に食べられてしまうのではないかと恐怖に感じ、それが後になってさらに発展して、5歳で死んだ主人公の妹も「大兄さん」によって食べられてしまったのだと確信するに至るのである。

しかし、物語が末尾に近づくにつれ、この『狂人日記』の作者が問題視しているのが「礼教=食人」ということよりも、むしろ中国における「食人」の「歴史」そのもの

のであることが判明する。それは第十章において次のように主人公が「大兄さん」に対して「食人」をやめるよう直接訴えかける場面からも見てとれる。

大兄さん、たぶん最初野蛮だった人は、みんなちょっと人食いをしたんでしょう。その後、考えが変わって、人食いしなくなった者がいて、ひたすら良くなるうと心がけたので、人になり、本当の人になったのです。でもなおも食べる者もいます——虫けららとて同様に、その一部は魚や鳥、猿になり、人にまで変わってきたんです。その一部は良くなるうと思わないので、今でも虫けらです。この人を食う人は人を食わない人と比べて、なんと恥ずかしいことでしょう。虫けらが猿に対して恥ずかしく思うのより、ずっとずっと劣ることでしょう。

易牙が自分の息子を蒸し料理にして、桀紂に食べさせたとは言っても、ずっと昔のことです。ところがなんと盤古〔伝説上の天地創造者〕が天地を開いて以後、易牙の息子までずっと食べ続けてきており、易牙の息子から徐錫林までずっと食べ続け、徐錫林からまた狼子村が捕まえた人まで食べ続けているんです。去年、皇城〔県の中心都市〕で犯罪者を首切り刑にしたときも、肺病の人が、その血を饅頭〔蒸しパン〕につけて舐めていました。³⁸⁾ (下線引用者)

まず、前半部分の生物進化論的な思考は魯迅本人も認めている³⁹⁾通り、ドイツの哲学者、F・ニーチェ(1844-1900)の『ツァラトゥストラはこう言った』から借用したものである⁴⁰⁾。つまり、作者はここで主人公に「食人」がいかに生物進化の観点から見て野蛮で愚劣な行為であるかということ語らせ、今までそれをよしとしてきた中国人に対する「国民性」批判を行っているのである。続いて後半部分では中国での「食人」の実例がいくつかあげられ、中国ではこれまで「ずっと食べ続けてきて」と述べられるのであるが、その中には春秋時代の料理の名人である易牙が自分の子を調理して桀や紂といった王に食べさせたという話もあり、これは見方によっては「食人」により極端な「忠」を示した例ともいえるが、その他はすべて「礼教」とは関係のない「食人」の例となっている。ちなみに、本文訳注によると、上記文中に出てくる「徐錫林」というのは魯迅と同郷の革命家、徐錫麟(1873-1907)の名前をもじったものとする説が有力であり、つかまって処刑された際に敵の衛兵に心臓を食われたと伝えられている。この

例に関しては、先に見た「肝っ玉が太くなる」などの民間信仰による「食人」か、あるいは極端な「忠」の実践によるものなのかははっきりしない。

作者の批判の矛先が中国における「食人」の「歴史」そのものに向けられていることは、第八章において主人公が夢の中で「男」に「人食いするのは、正しいことか?」⁴¹⁾と問い詰める場面からもうかがうことができるし、第十二章の「四千年の人食いの履歴を持つ僕、最初は知らなかったが、今こそわかった、本当の人に顔向けできない!」⁴²⁾という叙述にもそれは表れている。

こうして、次の有名な二行の文によってこの『狂人日記』は終わるのである。

人食いをしたことのない子供は、まだいるだろうか?

子供を救って……⁴³⁾

以上、ここまで『狂人日記』の内容について詳しく見てきたが、次節ではもう一度論点を整理しながら作者の本作品における中心的なモチーフについて考えていく。

2. 3 『老子』の逆説論と「暴君治下の臣民」

前節で見てきた通り、本作品『狂人日記』における作者の批判の重点はあくまで中国における「食人」の「歴史」そのものにあり、けっして「礼教=食人」という構図による「礼教批判」にあつたわけではないことが判明した。ではなぜこの作品がただ単純に「礼教批判」の書のように見えてしまうかという、一つにはやはり本作品全体を通して、主人公の「大兄さん」が妹の肉を食べ、次に主人公自身も狙われているのだという「狂人」としての主人公の妄想が、あまりに奇抜でインパクトがあるためだろうと思われる。さらには、「子を易(か)えて食す」などという現代人が読んだらきわめてショッキングな例も引かれており、家族的絆の中心にある儒教の「孝」とは実は「食人」の思想なのだとして作者が暴露しているようにも見え、それこそがこの作品の主題なのだとして読者がかかってに思い込んでしまうということも考えられる。実際、『狂人日記』が発表されると、その翌年に呉虞は「食人と礼教」(「喫人と礼教」)という論文を『新青年』に投稿し、「私は『新青年』で魯迅君の『狂人日記』を読み、覚えず多くの感想をもった。我々中国人の絶妙なるは、一方で食人をしながら、また一方で礼教を説くことができるところにある。食人と礼教は本来き

わめて相矛盾するものであるのに、彼らは当時の歴史にあって行動にまったく矛盾がないと思っており、これはまことに奇怪なことである」と述べている⁴⁴⁾。

また、本論の第2章第1節でも述べた通り、当時魯迅にこの『狂人日記』の執筆を依頼した『新青年』誌上では盛んに「礼教批判」が行われており、魯迅自身が小説の内容をいくらかそちらに合わせたのではないかという見方もできる。そのあたりの事情については、魯迅はまず「私は当時「文学革命」に対して、実をいうと決してそれほど熱情をもっていたわけではなかった」⁴⁵⁾とし、さらに次のように述べる。

直接「文学革命」に対する熱情でなしに、どうして筆を取ったのか？ 考えてみると、大部分はむしろ熱情をもった人々に対する同感のためであった。これらの戦士は、寂寞の中にあるが、その考えは正しい。少し吶喊の声をあげて助勢してやろうか、そう私は思った。最初は、ただそれだけのためであった。⁴⁶⁾

これを見ると、本作品『狂人日記』が国民性批判としての「食人」批判という明確な主題をもちながら、「礼教批判」のほうにも重きが置かれているように見える理由の一端が説明できるように思う。作中に述べられる「食人」の「歴史」は「四千年」であり、「礼教批判」の文脈でいわれる「礼教」のその「二千年」に比べたらはるかに長いのであって、その本来は一部分であるはずの「礼教」の名の下に行われた「食人」をやや誇張して書いたのが、この『狂人日記』だったといえるのではないだろうか。

では次に、本論のテーマである「批孔」（礼教批判）と「食人」の作品内における関係とはいったいどのようなものであるのかについて考えていきたい。これを考えるヒントは、魯迅が日本留学時代からの親友である許寿裳（1881-1948）に送った1918年8月20日の手紙の中に見出される。その中で魯迅は本作品『狂人日記』に関して、次のように解説しているのである。

前に私は中国の根底はすべて道教に在るといったことがありますが、この説が最近では大分広まっています。その考えで歴史を読めば、多くの問題が何の造作もなく解けます。その後たまたま『通鑑』（宋代の歴史書『資治通鑑』のこと；引用者）を読み、中国人はなお人食い民族だと悟り、そこでこの作品を書いたわけです。⁴⁷⁾（下線引用者）

まず、ここでいわれている「道教」についてであるが、これは民間信仰としての道教を指すと同時に、続けて「その考えで歴史を読めば、多くの問題が何の造作もなく解けます」といっているのも、それとも縁の深い「道家思想」のことも指しているものと思われる。先にも指摘したように、『狂人日記』における「食人」は多くの場合、その直接的な理由が道教などの不老長生を目的とする民間信仰にあった。おそらく魯迅が言っているのもそのことだと思われる。さらに大事なことは、道家思想を代表する『老子』の中に、次のような一節があることである。

大道廢れて、仁義有り。智慧出でて、大偽有り。六親和せずして、孝慈有り。国家昏乱して、貞臣有り。（すぐれた真実の「道」が衰えて、そこで仁愛と正義を徳として強調することが始まった。人の知恵とさかしらがあらわれて、そこでたがいにだましあうひどい偽りが起こった。身内の家族が不和になって、そこで子供の孝行と親の慈愛が徳として強調されるようになった。国家がひどく乱れて、そこで忠義な臣下というものがあらわれた。）⁴⁸⁾

これは「老子道德経 上篇」に収録されている有名な逆説論であるが、まさに『狂人日記』の世界そのものであるともいえる。「すぐれた真実の「道」が衰え、人々が「たがいにだましあ」い、「身内の家族が不和になって」、「国家がひどく乱れて」いるような状況、つまりこの『狂人日記』において「礼教」の名の下に「食人」が行われるのはいつだってそのような状況下でのことなのであり、「礼教」の欺瞞性もはっきりとそこに見出されるのである。では、なぜその行動が「食人」などという極端な方向に走ってしまうのかというと、魯迅の次の言葉にそのヒントが隠されているといえる。

暴君の治下の臣民は、大い暴君よりもっと暴である。暴君の暴政は、大い暴君の治下の臣民の欲望を満足させることはできない。⁴⁹⁾

以上のことを『狂人日記』の主人公を取り巻く世界に置き換えてみるならば、まず「国家がひどく乱れて」「すぐれた真実の「道」が衰え、人々が「たがいにだましあ」うようになって「身内の家族が不和になり、一家の「暴君」となった「大兄さん」には妹の肉が食用に提供され、今では主人公は「僕自身の番となった」と思っ

ている、というふうに解釈できるし、当然作者も作中において意図的にそのような環境を作り出しているのだといえる。したがって、もしこのまま物語が続いていったなら、「暴君の臣民」である主人公はひょっとしたら自ら進んで自分の肉を「大兄さん」に提供したかもしれないという気さえてくるのである。

つまり、この『狂人日記』における「批孔」と「食人」との関係は、『老子』の逆説論と魯迅の「暴君治下の臣民」に関する考察によって結ばれているとひとまずは結論づけられるのではないだろうか。

3. おわりに

本論では魯迅『狂人日記』を題材に、そこに語られている「批孔」(礼教批判)と「食人」の関係について考察してきた。なぜこういうテーマにしたかといえば、最初にも述べた通りそこにこそこの作品の「難解さ」の根源があると考えたからである。結果的に、両者は『老子』の逆説論と魯迅の「暴君治下の臣民」に関する考察によって関係づけられるものであることが分かり、本作品の「難解さ」も少しは解きほぐせたような気がしている。もし機会があったら、また新たなテーマで本作品を読解してみたいと思う。

注

- 1) 加地伸行『儒教とは何か』(中公新書、増補版、2015年)、25-26頁。
- 2) 同前、34-50頁。
- 3) 同前、20頁。
- 4) 同前、26頁。
- 5) 陳独秀(1879-1942) 中華民国の思想家、革命家。1915年上海で『青年雑誌』を編集主催し、翌年『新青年』と改題。1921年中国共産党成立とともに中央委員長に就任し、最初期の共産主義運動の指導者となる。
- 6) 陳独秀「憲法与礼教」、『新青年』第2巻第3号(1916年11月)。
- 7) 陳独秀「孔子之道与現代生活」、『新青年』第2巻第4号(1916年12月)。
- 8) 呉虞「家族制度為專制主義之根拠論」、『新青年』第2巻第6号(1917年2月)。
- 9) 加地伸行訳注『論語 増補版』(講談社学術文庫、2009年)、18頁。
- 10) 原文は以下の通り。其於銷弭犯上作乱之方法、惟恃孝弟以収其成功。
- 11) 原文は以下の通り。其流毒誠不減於洪水猛兽矣。
- 12) 当時の儒教批判の全体像については、片山智行が著書の中で詳しくまとめている。片山智行『魯迅のリアリズム』(三一書房、1985年)、222-266頁を参照。
- 13) 胡適「文学改良芻議」、『新青年』第2巻第5号(1917年1月)。
- 14) 陳独秀「文学革命論」、『新青年』第2巻第6号(1917年2月)。
- 15) 林彪(1908-1971) 中国の軍人、政治家。一時は毛沢東の後継者とされるも、1971年毛沢東暗殺に失敗して国外脱出、その逃亡中にモンゴルにて乗っていた飛行機が墜落し死亡。
- 16) 本論では当時の政治闘争の内容や、そこで魯迅がとりあげられた思想的経緯については触れるつもりはない。それらの問題については、片山智行「魯迅と「批孔」」(『人文研究』、大阪市立大学、1974年)に詳しく述べられているので、そちらを参照されたい。
- 17) 『魯迅批孔反儒文輯』(人民文学出版社、1974年)、「出版説明」。原文は以下の通り。偉大的共産主義者魯迅在他戰闘的一生中、对以孔子為代表的儒家思想進行了堅決的不妥協的闘争。他的許多文章、深刻地剖析了孔子学說的反動性和虚偽性、揭露了從袁世凱到蒋介石等反動派和帝国主義者尊孔誦經的反動實質、從政治上、思想上、理論上給儒家思想以有力的批判和打撃。
- 18) もともと国民革命軍総司令であった蒋介石は共産党員を大量殺害した「四・一二反共クーデター」(1927年)を経て、翌年には封建軍閥を討伐して全国統一に成功、北京に入城して政權を掌握したが、その後も共産党に対する激しい弾圧は続けられた。
- 19) 魯迅は1930年代に日本の『改造』等に数篇日本語によるエッセイを寄稿している。
- 20) 魯迅が日本に留学していたのは1902-09年であり、本エッセイで語られているエピソードは、東京の弘文学院速成課で日本語を学んでいた最初の2年間の頃の話である。
- 21) 以上、魯迅「現代支那に於ける孔子様」(『改造』第17巻第6号、1935年6月)より抜粋。表記に関しては旧字体を新字体にあらため、旧仮名遣いはそのままにした。
- 22) ここでいう「革命」思想とは、魯迅が生涯にわたつ

- て取り組み続けた中国人の国民性の改良や中国社会の改良に関する思考や問題提起のことである。その中で魯迅はたびたび人間を「圧迫者」(あるいは「主人」、「権力者」など)と「被圧迫者」(あるいは「奴隸」、「愚民」など)の二種類に分けて議論を行っている。
- 23) 片山智行『孔子と魯迅 中国の偉大な「教育者」』(筑摩書房、2015年)、13-14頁。
- 24) 魯迅(藤井省三訳)『故郷/阿Q正伝』(光文社古典新訳文庫、2009年)、271頁。原文は以下の通り。今天晚上,很好的月光。我不見他,已是三十多年;今天見了,精神分外爽快。才知道以前的三十多年,全是發昏;然而須十分小心。不然,那趙家的狗,何以看我兩眼呢?我怕得有理。魯迅『魯迅全集第一卷』(人民文学出版社、2005年)、444頁。表記に関しては簡体字を日本式漢字にあらためた。以下同。
- 25) 同前、271-272頁。原文は以下の通り。早上小心出門,趙貴翁的眼色便怪:似乎怕我,似乎想害我。還有七八個人,交頭接耳的議論我,又怕我看見。一路上的人,都是如此。其中最凶的一個人,張着嘴,對我笑了一笑;我便從頭直冷到腳跟,曉得他們布置,都已妥当了。同前、『魯迅全集 第一卷』、445頁。
- 26) 同前、273-274頁。原文は以下の通り。最奇怪的是昨天街上的那個女人,打他兒子,嘴里說道,“老子呀!我要咬你幾口才出氣!”他眼睛却看着我。我出了一驚,遮掩不住;那青面獠牙的一伙人,便都哄笑起來。同前、『魯迅全集 第一卷』、446頁。
- 27) 同前、274頁。原文は以下の通り。前幾天,狼子村的佃戶來告荒,對我大哥說,他們村里的一個大惡人,給大家打死了;幾個人便挖出他的心肝來,用油煎炒了喫,可以壯壯胆子。我插了一句嘴,佃戶和大哥便都看我幾眼。今天才曉得他們的眼光,全同外面的那伙人一模一樣。想起來,我從頂上直冷到腳跟。他們會喫人,就未必不會喫我。同前、『魯迅全集 第一卷』、446頁。
- 28) 同前、275-276頁。原文は以下の通り。凡是總須研究,才會明白。古來時常喫人,我也還記得,可是不甚清楚。我翻開歷史一查,這歷史沒有年代,歪歪斜斜的每葉上都写着“仁義道德”幾個字。我橫豎睡不着,仔細看了半夜,才從字縫里看出字來,滿本都写着兩個字是“喫人”!書上写着這許多字,佃戶說了這許多話,却都笑吟吟的睜着怪眼睛看我。我也是人,他們想要喫我了!同前、『魯迅全集 第一卷』、447頁。
- 29) 新島淳良『魯迅を読む』(晶文社、1979年)、42頁。
- 30) 前掲、『故郷/阿Q正伝』、276頁。原文は以下の通り。早上,我靜座了一会。陳老五送進飯來,一碗菜,一碗蒸魚;這魚的眼睛,白而且硬,張着嘴,同那一伙想喫人的人一樣。喫了幾筷,滑溜溜的不知是魚是人,便把他兇肚連腸的吐出。前掲、『魯迅全集第一卷』、447頁。
- 31) 同前、277-278頁。原文は以下の通り。不要亂想,靜靜的養!養肥了,他們是自然可以多喫;我有什麼好處,怎麼會“好了”?他們這群人,又想喫人,又是鬼鬼崇崇,想法子遮掩,不敢直捷下手,真要令我笑死。我忍不住,便放聲大笑起來,十分快活。自己曉得這笑聲里面,有的是義勇和正氣。老頭子和大哥,都失了色,被我這勇氣正氣鎮壓住了。但是我有勇氣,他們便越想吃我,沾光一點這勇氣。老頭子跨出門,走不多遠,便低聲對大哥說道,“趕緊喫罷!”大哥點點頭。原來也有你!這一件大發見,雖似意外,也在意中:合伙喫我的人,便是我的哥哥!喫人的是我哥哥!我是喫人的人的兄弟!我自己被人喫了,可仍然是喫人的人的兄弟!同前、『魯迅全集 第一卷』、448頁。
- 32) 今回参照した日本語訳版の本文には訳者・藤井省三による訳注がつけられており、その中で、先の引用文中において「爺さん」が「早めに召し上がるように!」といったのは葉のことを指しているのに、主人公が勝手に自分のことだと勘違いした可能性が指摘されている。本論でもその説にしたがって解釈することにする。前掲、『故郷/阿Q正伝』、279頁注2を参照。
- 33) 前掲、『故郷/阿Q正伝』、278頁。原文は以下の通り。這幾天是退一步想:假使那老頭子不是劊子手扮的,真是醫生,也仍然是喫人的人。他們的祖師李時珍做的“本草什麼”上,明明写着人肉可以煎喫;他還能說自己不喫人麼?前掲、『魯迅全集 第一卷』、448頁。
- 34) 前掲、『故郷/阿Q正伝』、279頁注3を参照。
- 35) 前掲、『魯迅全集 第一卷』、455頁注4を参照。
- 36) 前掲、『故郷/阿Q正伝』、278-279頁。原文は以下の通り。至於我家大哥,也毫不冤枉他。他對我講書的時候,親口說過可以“易子而食”;又一回偶然議論起一個不好人,他便說不但該殺,還當“食肉寢皮”。我那時年紀還小,心跳了好半天。前天狼子

- 村佃戸來說喫心肝的事,他也毫不奇怪,不住的點頭。可見心思是同從前一様狼。既然可以“易子而食”,便什麼都易得,什麼人都喫得。我從前單聽他講道理,也糊塗過去;現在曉得他講道理的時候,不但唇邊還抹着人油,而且心里滿装着喫人的意思。同前、『魯迅全集 第一卷』、448-449頁。
- 37) 同前、『故郷/阿Q正伝』、279頁、注4と注5を参照。
- 38) 同前、285-286頁。原文は以下の通り。大哥,大約当初野蛮的人,都喫過一点人。後來因為心思不同,有的不喫人了,一味要好,便變了人,變了真的人。有的不要好,至今還是虫子。這喫人的人比不喫人的人,何等慚愧。怕比虫子的慚愧猴子,還差得很遠很遠。“易牙蒸了他兒子,給桀紂喫,還是一直從前的事。誰曉得從盤古開闢天地以後,一直喫到易牙的兒子;從易牙的兒子,一直喫到徐錫林;從徐錫林,又一直喫到狼子村捉住的人。去年城里殺了犯人,還有一個生癆病的人,用饅頭蘸血舐。前掲、『魯迅全集 第一卷』、452頁。
- 39) 魯迅『『中国新文学大系』小説二集序』、『魯迅全集 第六卷』(人民文学出版社、2005年)、246-247頁を参照。
- 40) 同書の「第一部」には次のようなくだりがある。「あなたがたは虫から人間への道をたどってきた。そしてあなたがたのなかの多くのものはまだ虫だ。かつてあなたがたは猿であった。だが、いまもお人間は、いかなる猿よりも以上に猿である。」ニーチェ(水上英廣訳)『ツァラトゥストラはこう言った(上)』(ワイド版岩波文庫、1995年)、15頁。
- 41) 前掲、『故郷/阿Q正伝』、282頁。原文は以下の通り。“喫人的事,对麼?”前掲、『魯迅全集 第一卷』、450頁。
- 42) 同前、290頁。原文は以下の通り。有了四千年喫人履歷的我,当初雖然不知道,現在明白,難見真的人!同前、『魯迅全集 第一卷』、454頁。
- 43) 同前、291頁。原文は以下の通り。没有喫過人的孩子,或者還有?救救孩子…… 同前、『魯迅全集 第一卷』、454頁。
- 44) 吳虞「喫人与礼教」、『新青年』第6卷第6号(1919年11月)。引用箇所の内容は以下の通り。我讀《新青年》里魯迅君的《狂人日記》,不覺得發生了許多感想。我們中国人,最妙是一面會喫人,一面又能夠講礼教。喫人与礼教,本来是極相矛盾的事,然而他們在當時歷史上,却認為並行不悖的,這真正是奇怪了。
- 45) 魯迅(竹内好訳)『『自選集』自序』、『魯迅選集 第9卷』(岩波書店、1956年)、36頁。原文は以下の通り。然而我那時對於“文学革命”,其實並沒有怎樣的熱情。『魯迅全集 第四卷』(人民文学出版社、2005年)、468頁。
- 46) 同前、37頁。原文は以下の通り。既不是直接對於“文学革命”的熱情,又為什麼提筆的呢?想起来,大半倒是為了對於熱情者們的同感。這些戰士,我想,雖在寂寞中,想頭是不錯的,也來喊幾声助助威。首先,就是為此。同前、『魯迅全集 第四卷』、468頁。
- 47) 『魯迅選集 第13卷』(松枝茂夫訳、岩波書店、1956年)、91-92頁。原文は以下の通り。前嘗言中国根柢全在道教,此說近頗廣行。以此讀史,有多種問題可以迎刃而解。後以偶閱《通鑑》,乃悟中国人尚是食人民族,因成此篇。『魯迅全集 第十一卷』(人民文学出版社、2005年)、365頁。
- 48) 金谷治『老子』(講談社學術文庫、1997年)、68頁。
- 49) 魯迅(増田渉訳)「随感録六十五 暴君の臣民」、『魯迅選集 第6卷』(岩波書店、1956年)、57頁。原文は以下の通り。暴君治下の臣民,大抵比暴君更暴;暴君的暴政,時常還不能鑿足暴君治下の臣民的欲望。前掲、『魯迅全集 第一卷』、384頁。